

洋式医学の成立過程に関する二つの仮説

——玄白の『形影夜話』をめぐって——

金丸 由雄

はじめに

科学を社会学の対象として考えるためには、少なくとも以下の条件が必要であらう。

- (1) 科学という人間行動の形態が、社会的な概念または変数によって、記述され説明されること。
- (2) このような概念又は変数を用いることによって、ある時代、ある社会に行われた科学が、他に比して特徴的に捉えられること。

社会変動という現象に興味を持っている者には、特に第2の点が重要に思われる。何故なら、いつ、いかなる社会状態にも等しく適用しうることを目的として構成された概念や変数のシステムは、ややもすると種々の社会状態の間に存在する相違を明瞭にすることが出来ず、従って何故ある社会体系が一定の状態から別の状態へ変化して行ったのかという最も重大な問題を不問のままに放置してしまうか、又は折角用いた概念や変数以外の条件をいくつか新たに導入することにより、ようやくこの変化を説明するという結果になりがちだからである。

そこでまず、この小論で用いる概念であるが、私は曾て西欧の宗教改革期における社会変動を説明する為に、1. 状況の定義 (Definition of Situation, 以下 D/S と略称)、2. 行為の規定 (Prescription of Action, 以下 P/A と略称)、3. 行為ないし行為の結果の評価 (Evaluation of Action and/or Consequences of Action, 以下 E/A-C と略称) という三つを用いたことがある¹⁾の

で、ここでもこれらの三概念を中心として考えを進めてみたいと思う。

分析の対象として取り上げるのは、日本における洋式医学の生みの親、杉田玄白のエッセイ『形影夜話』に関する二つの論文²⁾である。

時代も背景も、そして何よりも性格の全く異なる人間行動に同じ概念のセットを適用しようと試みる理由は、もしこれによって何か意味のある考察を引き出すことが出来た場合には、それらが宗教ばかりでなく科学の分野にも有効に用いることが出来るということが、ある程度立証されたことになり、更にそれらを用いて幕末維新の西洋科学輸入という大問題に取り組もうとしている私にとって、一つの重要な理論的足掛りを提供してくれる筈だからである。

I 古医方の性格

ある社会のある時代における科学は、その社会における他の人間活動の分野、特に最も大きな威光を有するとされている分野のそれと密接な関係があるように思われる。例えば17世紀末頃から京都を中心にして興って来た古医方という日本的医学に先行する李朱医学は、幕府の官学であった朱子学と密接な関係にあった。密接な関係にあったということは、李朱医学を奉ずる医家が多く朱子学の徒であったというだけではない。両者を構成する基本的範疇が相似なのである。それは科学史家によると、人体の各部の状態や働きを理解したり、治療法を論じたりするに当って、陰陽五行という形而上学的概念を以ってした。古医方家達が痛撃したのは正しく李朱医学のこのような性格だったのである。そこには動かし難い權威をもって存在する状況の定義がまずあって、これに従って病気の処方が施され、恐らく処方の効果の測定もまたそれに基づいて行われたのである。従ってこのような李朱医学の性格を上記述べた社会学的概念で表現するならば、次のように示すことが適当であろう。

$$\begin{array}{l} D/S \rightarrow p/a \\ \quad \searrow e/a-c \end{array}$$

状況の定義を大文学の D/S で記し、行為の規定（医学では処方がこれに当

る)と処方の効果の判定, 即ち行為又は行為の結果の評価を各々小文字の p/a と e/a-c で表したのは, 前者が normative な性格を有し基本的であるのに対して, 後者がそこから派生的に生じている範疇としか考えられないからである。

ではこのような李朱医学を批判しつつ出現し, 玄白が『解体新書』を翻訳しようと思いついた頃盛行を極めていた古医方はどのような構造を有していたのであろうか。

一口に古医方と言っても, 京都におけるリーダー達だけでも五指を屈する程居り, その主張するところはそれぞれ少しずつ違うようであるが,³⁾ それらは一般に『親試実験主義』と形容されるように, 従来の医学の思弁的性格を排して, 専ら「特定の病症のそれぞれに対して実効ある方剤を経験的に探究する」⁴⁾ ことに目的を置いていた。このような古医方家達の行動様式について述べたと思われる玄白の言葉が, その著『狂医の言』に載っているので以下にその現代語訳を引用してみよう。

「シナの医書には『方』(医術)はあっても『法』(根本原理)がないのです。法が全然ないというわけでもないのですが, 法とされているものの根拠が明らかではありません。……たとえばいまここに一人の婦人が病気になっているとします。脈が遅く, そのうえ臍の右上あたりになにか塊があって, ときどきずきずき痛くなつては微熱が出るとします。これをためしに, シナ医学に通じている三人の医者に診せてごらん下さい。一人は食積(消化不良)だと言ひ, 一人は悪血のせいだと言ひ, もう一人は飲癖(水滯=体液変調)だと言ひでしよう。 またこの三人に治療させてごらん下さい。はじめ五日の間消化のための薬をやつてなおらなければ, つぎの十日間は破血の薬を与え, 悪血を出させようとするでしよう。それでもなおらなければまた十日間, こんどは体内水分調整のための逐水の薬をくれたりするでしよう。 さいわいにもこれでなおれば, 医者はさすがによく自分は病気を知っていたと思ひ, 病人の方も良医にめぐりあえてさいわいだったとよろこびます。しかしもし不幸にもなおらないでしまえば, 医者はただ茫然として結局なんの原因でこの婦人が死んだのかわからず, 病人の方もなぜ自分が死ぬのかわから

24 洋式医学の成立過程に関する二つの仮説

ないままです。これはつまり、病気の根本が明らかでなく、医学の根本原理が正しくなかったからにはほかなりません。」⁵⁾ (アンダーラインは金丸)

ここで古医方家達は『方』、即ち行為の規定あって、『法』、即ち状況の定義なきものと批判されているばかりでなく、その『方』が『法』に導かれていない為に、いわばカンによりほどこされ、更に決して『法』という型の知識の蓄積につながって行かないことが指摘されている。従ってこのような古医方家達の行動様式は、以下のように記号化して表現するとその性格が明瞭となろう。

$$\begin{array}{ccc} P/A_1 & \rightarrow & E/A-C_1 \\ & \swarrow & \\ P/A_2 & \rightarrow & E/A-C_2 \\ & \swarrow & \\ P/A_3 & \rightarrow & E/A-C_3 \\ & \vdots & \\ & & \vdots \end{array}$$

このようなシステムからは狭い意味での技術又は技倆は生れても、科学は決して生れない。科学とは、まず仮説 (D/S) があって、そこから調査又は実験の方法 (P/A) が導かれ、その調査乃至は実験の結果が評価 (E/A-C) されて、仮説の確認、修正、変更が行われ、又新たに実験、調査が企てられて行くという、循環して止ることのない作業に他ならないからである。

古医方家達は、政治哲学と基本的範疇を一にする状況の定義に支配されていた李朱医学を批判し攻撃する作業を通じて、古い D/S を破棄した結果、彼らの体系から、科学を科学たらしめる上で欠かすことの出来ない仮説まで追い出してしまった。玄白らが、『解体新書』を世に問うた最も重大な意義は、実にこの状況の定義、即ち D/S を再び医学の根本に、しかも親視実験的に据え直したことにある。

Ⅱ 二つの仮説

では玄白達の主張した医学的理論は一体どのようにして生れたのであろうか。実はこれには私の僅かに目を通すことの出来た限りでも少なくとも二種の

理論ないし仮説があって、私のように科学史、特に日本医学史の専門家でない者には、はたしてどちらが妥当なのか判断の下しようがないのであるが、これら二つの理論には、興味深い相同と相違が含まれて居り、それらを前述した概念のセットによって記述するとともに、そこに盛られている含意を明らかにしようというのが本稿の主な目的である。

1) 佐藤昌介氏の仮説

佐藤昌介氏はその労作『洋学史研究序説』⁶⁾などにより著名な洋学史研究者であるが、同氏によると、玄白が『法』と『方』とを連続的に把えるようになったのは、「『解体新書』の翻訳の結果なのではない。逆にこのような思想がかれの内部にすでに成熟しており、これが起動力となって『解体新書』の訳業がなしとげられたとみるべきである」⁷⁾と言う。そしてこのような考え方の源流は徂徠学にありとし、その証拠を玄白のエッセイ『形影夜話』の中にある徂徠の兵書『鈴録外書』についての言及に見ようとする。今玄白の『形影夜話』のうち、問題の個所の現代語訳を念の為引用すると、それはつぎのようなものである。

「こうして年月をすごすうちに、ふと荻生徂徠先生の『鈴録外書』(軍法不審のことをくわしく説明したもの)という本を見た。そのなかに、本当の戦さというものは、いまの軍学者たちが人に教えるようなものではない。土地にはけわしいところもあり、そうでないところもある。兵にも強弱がある。いずれのとき、いずれのところでもおなじように準備し、型にあてはめて、あらかじめ勝敗を論じられるものではない。すべて「あしの原」「かやの原」では弓は用をなさぬ。雨ふりのときは、鉄砲は役に立たぬ。ことに平和の世のときのように、いつでも硫黄や焰硝、鉛の類が町で買えるというわけにはいかない。諸国が乱れたときには、鉛は出るが焰硝は出ぬ国もあれば、焰硝と硫黄は出ても鉛が出ぬ国もあるものである。鉄砲があっても、うつことはできない。常に軍理を学び、そのうえで大将の決断にしたがって、勝敗は、その時その時に定まるものだ、と書いてある。

わたしはこれを読んで、はじめて啓発された。本当にそのとおりだ。われわれ医者もとらわれた古い習慣をあらって、面目をあらためなければ、大事業はできないとさとした。このことがあってから、はじめて、本当の医学の真理はオランダの医学にあることを知った。それというのは、そもそも医術の根本は、人の身体の正常の形態、内外の様子をつまびらかに知りきわめるのが、この道のもっとも大切なことである、とオランダでいっているからである。」⁸⁾

以上の玄白の言葉を佐藤氏は次のように解釈されている。

『……玄白の理解に従えば、徂徠の解する戦争の実態は、病気と同様、混沌として複雑な事象である。これに対して、徂徠は「常に軍理を学び得て、大将の量に従ひ、勝敗は時に臨て定まるもの也」と説いている。ところで徂徠のいう軍理とは、実戦の客観的研究から帰納された戦争の理法を意味していた。玄白が徂徠の兵学思想から啓発されたのは、医術もまた、軍学と同様、客観的な基礎に立たねばならぬ、ということであった。それは、技術に対する基礎科学の関係の認識に、かれが到達した、ということの意味する。すなわち、「夫医術の本源は人身平素の形体、内外の^{ようす}機会の精密に知り究るを以て、此道の大要となす」というのが、オランダ医学の特質であるがゆえに、「真の医理は遠西阿蘭にあること」をさとしたというのは、この事実を示すものにほかならない。』⁹⁾

この佐藤氏の理解のされ方については、私には必ずしも完全に諒解の出来ない点がないではないが、ここで問題となる重要な論点は以下のように要約されよう。

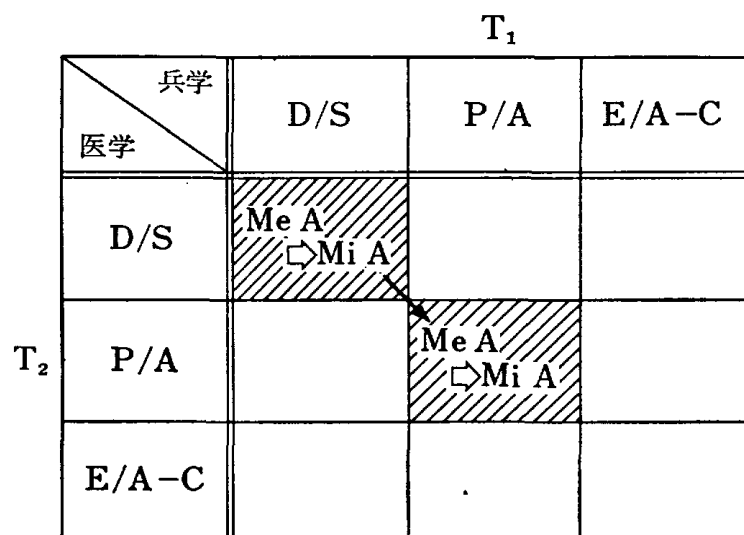
- (1) 玄白は、医学における状況の定義 D/S の重要性を徂徠の兵学から学んだ。
- (2) 更に、医学においても、兵学におけると同様、行為の規定 P/A は、状況の定義 D/S から導き出されるべきであることを理解した。
- (3) このような徂徠学における兵学の構造を理解し、それに啓発されて後、オランダ医学にも同じような主張があることを知って、オランダ医学の正

しさを知った。

前項ですでに、玄白が乗り越えようとしていた古医方のシステムには、行為の規定 P/A と行為又は行為の結果の評価 E/A-C はあっても、状況の定義 D/S はないことを見ておいたが、佐藤氏によれば、玄白はこの D/S の重要性を、当時の社会において最も威光ある制度的領域であった政治学／兵学の分野における教説から学んだことになる。ここではまず、正しい D/S があってはじめて数ある P/A の中から適当なものが選択され得るとされているのである。

そこでこのような政治学／兵学と医学との間の影響関係を図示するならば、第1図のように表わすことが可能であろう。図中 MeA とあるのは Medical Action System の略であり、MiA とあるのは Military Action System の略である。そして MeA ⇨ MiA という矢印は、玄白が自分の医学的行動を考えるに際して、徂徠による兵学的行動のシステムをモデルにしたという、準拠関係の方向を示すものである。又横軸、即ち兵学的行動系の方を T_1 とし、縦軸、即ち医学的行動系の方を T_2 としたのは、モデルとなった『鈴録外書』の方が、玄白の医学的行動系より明らかに時間的に先立って成立しているからに外ならない。佐藤氏によれば、玄白は、このように『解体新書』翻訳という作業にかかる前に、当時の最も威光ある制度的領域における教説をモデルとし

第1図 佐藤昌介氏の見解に基づく玄白における兵学と医学の準拠関係



て、状況の定義の重要性の認識に達していたのであり、そしてこれと同じ構造を、オランダ医学に認めたが故にオランダ医学学習に邁進して行ったのである。これを言い換えるならば、日本における洋式医学成立の端緒となったのは、日本の医学自体が、日本の兵学（乃至政治学）から影響を受け、これをモデルとしたことにより、D/Sの重要性を自分自身で認識したことにあるということである。それは国内的及び国際的な二重の意味における準拠行動であって、その構造を精確につきとめることが、何故日本は西洋科学を比較的スムーズに輸入することが出来たかという理由を理解する為の重要な鍵となるのではないかとすら、私には予想されるのである。

2) 山崎彰氏の仮説

上述した佐藤昌介氏による玄白の洋学的医学創始過程の理解に興味ある対立を示す見解が、山崎彰氏による好編「『和魂洋才』的思惟構造の萌芽——杉田玄白を中心に——」¹⁰⁾に見られるので、その所論のうち、特に本稿と関係の深い部分を追ってみよう。

山崎氏による玄白の医学体系の理解のされ方は、佐藤氏のそれに比して複雑であり、同氏はこれを“蘭漢折衷の医学”と呼んでおられるが、その論点は、以下のように要約されよう。

- (1) 玄白は解屍実験や『解体新書』翻訳という行為を通じて、D/Sの重要性を認識し、東洋医学を否定して、オランダ医学に就こうとした。
- (2) にも拘らず、オランダ医薬品が入手困難であるといった事情から、治療の実際においては従来とほとんど同じ漢方を使用せざるを得なかった。そして玄白はこの漢方の使用を通して改めて東洋医学に対する評価をしながら行った。
- (3) 玄白が『形影夜話』を書いたのは、このような“蘭漢折衷の医学”の妥当性を論理的に説明しようとしたものであって、この作業において玄白は徂徠著すところの『鈴録外書』中の兵学論のうちに、彼の“蘭漢折衷の医学”を論理化する為のヒントを見出したのである。

- (4) 玄白が『鈴録外書』に接したのは、解屍実見〔1771年〕以前ではなく、『形影夜話』の著された〔1802年〕頃であった。

このような山崎氏の見解で特にここで注目すべきは以下の二点であろう。

- (a) 玄白が D/S の重要性の認識に達する為には、医学以外の分野における人間行動の体系にモデルをあおぐ必要はなかった。それは解屍実験や医学書の翻訳という、医学的行動のみを通じて獲得されたものである。
- (b) 『形影夜話』を著した頃、玄白は処方には必ずしもオランダの薬品を要せず、従来の漢方も適宜その効果に応じて使用すべきであるという認識に達して居り、このようにそのもたらす結果が同じなら、蘭方でも漢方でも便宜に応じて用いるべきであるという主張が、徂徠の『鈴録外書』における上述の部分により裏付けられると考えていた。

第一点は、一種の科学革命が、医学という分野でいわば自己発展的に生じたという命題であって、それ自体非常に重大であると同時に、これを受け入れる為には慎重な検討と考慮が必要であることは言うまでもない。(蛇足ながら、佐藤昌介氏の『形影夜話』の理解は、このような玄白による科学革命、即ち新たな D/S の発見が、兵学分野における教説により促進されたというものであることを附言しておく。)

然しこの小論が主として問題にしているのは、玄白の医学体系に対してはたした『形影夜話』の役割であるから、ここでは専ら上の第二点に考慮を集中することにする。ところでここで注意されねばならないのは、山崎氏が玄白における“蘭漢折衷の医学”と言うとき、同氏は人体の解剖学的知見 (D/S) よりもは、処方がもたらす効果 (E/A-C) を中心に考えているということであり、ここに佐藤氏の『形影夜話』の評価の仕方との根本的な相違がある。この相違は、玄白が徂徠の『鈴録外書』披見の時期を解屍実験——最も端的な状況の定義 D/S の試みである——以前とする佐藤説と、解屍実験や『解体新書』翻訳という解剖学的知見を踏まえて多くの実際的治療の効を積み、種々の処方を試みてその評価——行為又は行為の結果の評価 E/A-C——に自信を持つに至った時期、即ち『形影夜話』成立の頃におく山崎説との違いに対応していること

は言うまでもない。

そこで、このような山崎説に従った場合の『形影夜話』における医学と兵学の準拠関係を図示するならば、第2図のように示しうるであろう。この第2図でまず注目されねばならない点は、縦軸即ち玄白における医学的行動系が T_1 、横軸即ち玄白における兵学的行動系が T_2 とされている点である。言い換えれば、この時点ではすでに、玄白においては種々の処方に対する評価が出来上っており、その評価に基づく処方の体系も又成立していたという理解がある。そしてこのような $E/A-C \rightarrow P/A$ というシステムを論理的に合理化する為に玄白が用いたのがさきに引用した徂徠の兵学理論 $D/S \rightarrow P/A$ というシステムであり、これが第2図の上では右下スミの枠から中央枠へと進む準拠関係として示されている所以である。繰り返して言うが、この山崎氏の仮説によれば、徂徠の兵学理論は玄白における医学理論のモデルとはなっておらず、玄白は、当時ようやく海外の風雲急を告げる状況に応じて重要性を認識されつつあった兵学という威光あるシステムを以って、自分の医学論を単に合理化 rationalize しようとしたに過ぎないのである。

このような理解がもし正しければ、玄白に続く日本の洋式医学もまた、このような効果又は結果の評価を常に出発点とするシステムに従いがちとなるろう。

第2図 山崎彰氏の見解に基づく玄白における兵学と医学の準拠関係

		T_2			
		兵学	D/S	P/A	E/A-C
T_1	医学				
	D/S				
	P/A		Me A □ Mi A		
	E/A-C	Me A □ Mi A			

山崎氏が少なくともそのように考えられて居られることは、同氏の次の言明からもうかがえるのである。

「……『解体新書』翻訳後に形成された蘭漢折衷医学に見られるように、玄白の実証主義と合理主義は、それを基礎として主体的・創造的に自然科学を追求するためのものではなく、与えられた素材の中から、有効なものを選びとるための手段としての意味しかもたなくなってしまうのである。」¹¹⁾

このことは、私の理解に従えば、いかなる科学的理論（例えば外国で発展させられた理論）も、理論そのもの、即ち D/S そのものとしては評価されず、そのもたらす結果があくまでも評価の対象となって始めて行動系の中に取り入れられるというシステムに他ならないのである。

Ⅲ 両仮説の含意について

前説でみたように、佐藤、山崎両氏の『形影夜話』に関する見解は鋭く対立するものではあるが、そこには又重要な共通点も含まれており、それは、玄白自身の『鈴録外書』に関する言明に現れているのである。

玄白が徂徠の兵学を佐藤説のように医学のモデルとしたにせよ、山崎説のように合理化の手段としたにせよ、いずれの場合も医学的行動系は兵学的行動系に準拠している。このことは一見当時の日本の社会においては、前者より後者の方がより大きな威光を有していたという事情を単に反映したものに他ならないように思われるかも知れない。

私はここで宗教改革とそれに続く数世代に著された経済行動に関する多くの著述を思い浮べざるを得ないのであるが、例えばウエーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』などに見られるそれは、ほとんど全て宗教家の手になるものであった。我々の理解によれば、少なくとも宗教改革とそれに続く幾世代かは、宗教が経済より大きな威光を有する制度であった。にも拘らず、経済的行為にたずさわる者ではなく、逆に宗教家達が経済的行為について種々の教説や弁明を行っているのである。そしてこのような宗教⇨経済とい

う準拠行動を通じて資本主義経済制度は、西欧社会における正統性を獲得して行ったのである。

このような近世西欧社会に見られる社会変動のプロセスに基づいて言い得ることは、新しい社会制度が成立する為には、それが当該社会において最も大きい威光を有する制度によって正統的存在として認知されねばならないという命題であろう。

我々が問題として取り上げた玄白における医学の社会的位置に関して言うならば、それは未だ当時の社会においては重要な制度として認められていたわけではなく、むしろ正統的地位を誇る兵学ないしは政治学に、何らかの形で追随し、認められようとする立場にあった。

ではいつ医学を含めた科学が日本の社会の中で、単に一部の人々によってではなく、多くの人々により重要な存在として認められるに至るのであろうか。それは言う迄もない。武士達が海外から迫る列強の圧力をひしひしと感じ取り、その力の背後にある科学／技術と何らかの形で直面せざるを得なくなった時期である。従って、日本における科学の制度化 institutionalization の問題は、幕末維新の切迫した政治的、軍事的状況との深い関連の下ではじめて理解が可能であろう。

最後に注意を払っておきたいことは、佐藤氏も山崎氏もともにその論文中に挙げている、玄白の『和蘭医事問答』における次の言葉である。

「オランダ人の説くところでは、眼というものにはまず水のような液体がある、その次に眼玉がある、またその次には鶏卵の白味のような水がある。その水に外界の万物が影を写すのですが、最初の水から三段階に写ってゆくのは、千里鏡とおめがねと同じ原理によるものと思われます。」¹²⁾

この『和蘭医事問答』は、周知のように奥州一関の医者建部清庵と玄白との間でオランダ医学をめぐる交された問答形式の書簡集で、上に引用した部分は玄白が清庵に1773年、即ち『解体新書』の翻訳が出来上った年に、書いたものである。ここで、人体の解剖学的所見の理解を助ける為の理論的モデルとして、望遠鏡の構造が用いられている。ということは、望遠鏡という西洋からの

輸入器機が、当時一般に知られ、用いられて、普及していたばかりでなく、その光学的原理迄も、少なくとも清庵のような知識人にはある程度まで諒解されていると玄白が考えていたことを示している。そこで注目されるのは玄白による次の証言である。

「だがそのころから世間には、なんとなくオランダから渡来したものを珍重する風がひろまり、なんでも舶来の珍器とあればよろこばれるようになってきた。すこしでも好事家といわれるような人でそういった品を多少とも集めて日ごろ愛玩していない者はないありさまであった。

ことに時代は、いまはなき相良侯（田沼意次）が老中として政権にあったころで、だいたい世の中が華美をきわめていたときである。その派手好みに乗って、オランダからは「ウェールガラス」(weerglas=清雨計) 天気験器, 「テルモメートル」(thermometer) 寒暖験器, 「ドンドルガラス」(donderglas=ライデン瓶) 震雷験器, 「ホクトメートル」(vochtmeter=比重計) 水液軽重清濁験器, 「ドンクルカームル」(donkerkamer) 暗室写真鏡, 「トーフランターレン」(tooverlantaren=幻燈機) 現妖鏡, 「ソンガラス」(zonglas=サングラス) 観日玉, 「ルーブル」(roeper=メガホン) 呼遠筒といったさまざまの器物が年々輸入され、そのほか種々の時計, 千里鏡(望遠鏡), またガラス細工のたぐいにいたっては、いちいち数えきれないほどだった。人びとはそれらを見ては、めずらしい工夫に驚き、その理屈の微妙なのに感心し、その結果、毎春將軍拝礼のオランダ人が江戸に来ているあいだは、その宿舎に訪問客がおのずから群がり集まることとなったのである。」¹³⁾ (アンダーラインは金丸)

上は言うまでもなく『蘭学事始』の現代語訳からの引用である。この田沼意次執政の時期(1767年¹⁴⁾~1786年)にはすでに、人々がオランダ製の器機の工夫と理屈の巧妙さに感心した余り、オランダ人にあれこれと尋ねる為とその宿を屢々訪問したというのである。勿論玄白も、良沢や源内とともに度々彼等を訪問していることは良く知られているところである。

ところでこれらの器機とは、一定の理屈(D/S)に導かれた工夫、即ちP/A

によって作られた結果である。当時の人々の中には、行為の結果であるこれらオランダ渡りの器機を肯定的に評価する (E/A-C) ばかりでなく、その背後にある P/A や D/S に対しても積極的に評価を下し、それらを生み出した人々と接しようと試みたものがすでに多く居たのである。

我々が玄白たちによる『解体新書』翻訳という達成が何故可能であったかという理由を理解する為には、このように当時の知的水準ばかりでなく、それを支えていた人々の態度ないしは準拠枠の存在を抜きにしては不可能であろう。18世紀末葉から医学を中心として興った洋学の成立過程を説明する為には、こうした当時の社会状態を正当に諒解することが、是非必要であるように私には思われるのである。

〈注〉

- 1) 金丸由雄, 「社会変動の構造——『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の検討——」, 『思想』 No. 595, 1974年 1月, pp. 49~77.
- 2) 佐藤昌介, 『洋学史研究序説』, 岩波書店, 昭和 39年, 第二章「徂徠学と洋学」. 山崎彰, 「「和魂洋才」的思惟構造の萌芽——杉田玄白を中心に——」, 有坂隆道編, 『日本洋学史の研究Ⅱ』, 創元社, 昭和 48年(第1版第2刷), pp. 37~66.
- 3) 佐藤昌介, 「洋学の思想史的基礎考察——医学思想を中心にして——」, 豊田武教授還暦記念会編, 『日本近世史の地方的展開』, 吉川弘文館, 昭和 48年, pp. 446~546 を参照されたい.
- 4) 杉本勲編, 『体系日本史叢書 19: 科学史』, 山川出版社, 昭和 49年(第1版第3刷), p. 228.
- 5) 杉田玄白, 「狂医の言」, 芳賀徹編, 『日本の名著 22: 杉田玄白』, 平賀源内, 司馬江漢, 中央公論社, 昭和 49年(再版), pp. 201~202.
- 6) 佐藤昌介, 前掲書.
- 7) 佐藤昌介, 前掲論文, p. 528.
- 8) 杉田玄白, 「形影夜話」, 芳賀徹編, 前掲書, pp. 310~311.
- 9) 佐藤昌介, 前掲書, p. 61.
- 10) 山崎彰, 前掲論文.
- 11) 山崎彰, 前掲論文, pp. 64~65. 同様な主張が同氏による続編「「和魂洋才」的思惟構造の形成と国家意識——大槻玄沢を中心に——」, 有坂隆道編, 『日本洋学史の研究Ⅲ』, 創元社, 昭和 49年(第1版第1刷) pp. 139~160 に見られる.

- 12) 杉田玄白, 建部清庵, 「和蘭医事問答」, 芳賀徹編, 前掲書 p. 170.
- 13) 杉田玄白, 「蘭学事始」, 芳賀徹編, 前掲書, pp. 97~98.
- 14) 意次はこの年に側用人になっているので, これも問題の時期に含めておいた.